

## モンゴル革命に対する

### ソビエト・ロシアの軍事介入について

磯 野 富士子

一九二一年六月二七日、ソビエト軍は外蒙の国境をこえて進撃し、その結果として、モンゴル人民党は正式結成からわずか一年あまりのうちに、革命を成功に導くことができたのである。こうした事情から、モンゴル革命はソビエトの膨脹政策の産物にすぎないとする論が、特にアメリカでは通説となり、近年にいたるまで、モンゴル革命はソビエトの侵略政策 (takeover) のモデルと見られている。<sup>(2)</sup>

この論によると、一九二〇年の夏にモンゴル人民党が結成されソビエト・ロシアに援助要請の代表を送ったのは、ひとえにソビエト側の工作によるものであり、内的必然性は何もなかったとされる。そして、一九二〇年秋に、セミヨノフの幕僚であったウンゲルンシユテルンベルク (俗に「きちがい男爵」として知られている) がモンゴルに入ったことを、ソビエト側は恰好の口実として使ったが、これは現実にはソビエトに大した脅威を与えるもの

ではなかったと見るのである。

マーフィーは、一九二一年夏のソビエト指導者たちは「連合軍に対する戦いに勝利を収めたところで、彼らの意気と自信は昂揚しており」、「ウルガに達し、外蒙の広大な地域を勢力下に収めることは、ソビエト政府にとって制し<sup>(3)</sup>がたい誘惑だったようである」と書いている。そして、レーニンの被圧迫民族解放の声明をひいて、ソビエト・ロシアの野心を証明しようとする。

もちろん革命思想の伝播はボルシェヴィクの政策の重要な一環であったにはちがいないが、一九二〇年から二一年にかけての、ソビエト・ロシアの内情と当時の国際状況を見れば、あの時期において、ソビエト・ロシアの首脳部が勢力拡張の軍事行動にのり出したとは思われないのである。

本稿の目的は、ソビエト・ロシアがモンゴル革命に軍事介入をした動機の考察であり、ソビエトのモンゴルに対する思想的・政治的影響については、別の機会にゆずることにしたい。なお、記述の便宜上、ここでは「モンゴル」を昔の外蒙古、現在のモンゴル人民共和国の意味に限りて使うことにする。

## 一 ロシア革命とモンゴル

モンゴルの反清独立運動（一九二一年）と、初期の内外蒙古統一・完全独立の夢が破れ、ロ・中の圧力のもとに一九一五年のキャフタ三派協定によって、「外蒙自治」に限られた経過については、日本ではすでにいくつかの概説・研究が出ているので、<sup>(4)</sup>ここでは繰返さないが、キャフタ体制に間もなく急激な変化をもたらしたのは、いうまでも

なく一九一七年のロシア革命であった。

その弱小民族支援の声明にも拘らず、モンゴルに関するかぎり、革命直後のソビエト政府はあまり明確な具体策を持たなかったようだ。中国側の資料によれば、露都で一九一八年一月二四日に行われた中国公使館秘書の李世中とソビエト外務委員会の人民委員代理ボリヴァノフとの非公式会談において、ボリヴァノフはソビエト政府がキャフタ条約の無効を認めることを述べ、なおモンゴルの処置につき個人的意見を求められると、「蒙古地僻民愚……此世界自不能独立自治、不如先由中華民國國民為其開化教育」と答えている。<sup>(5)</sup>

この点ではむしろモンゴル人の方が積極的で、早くも一九一七年の一二月には、モンゴルの「代表」がイルクルクのシベリア・ソビエト中央執行委員会に現われて、中国からの解放に援助を求めた。ただしこれは、南からの圧迫を免れるために北に援助を求めるといふ、モンゴルの伝統によったものであって、特別に思想的な動機から出たものではなかったようだ。モンゴルの学者は、国境の進歩的王公が個人的に思いついた企てと見ている。<sup>(6)</sup>

しかし、モンゴルに対する具体的政策はともかくとして、ソビエト政府は被圧迫民族の解放のたてまえから、一九一九年の夏に、モンゴル人民と自治政府にあてて「メッセージ」を送り、中国の宗主権を認めた一九一三年の中・ロ共同声明を破棄し、モンゴル人民は独立国として「北京にもペトログラードにも無断でいずれの外国とも自由に直接交渉をもつ自由がある」ことを宣し、彼らに代表を送って赤軍と連絡をとるように呼びかけている。<sup>(8)</sup>

ただしこれが実際にモンゴル人の中国離脱を助けようとする意図でないことは、やはり同年七月二五日に中国に送られた、いわゆる「カラハン宣言」<sup>(9)</sup>を見ても明らかである。その第六条は、中国もソビエトにならって、その少

数民族に自治を与えることを希望しているものの、中国の主権とモンゴル独立の承認とが相容れない点は、ここでは全く忘れられ、あるいは不問に付されている。

ただしこの「メッセージ」がモンゴルに届いたのは、一九一九年の末であり、それも反動的な支配層に遮られて、人民の知るところとはならなかった。<sup>(10)</sup>しかし、そうした呼びかけを待つまでもなく、モンゴル人民の間には革新的な動きが生れていた。

ロシア革命によって、帝政時代の経済的援助と对中国牽制の後盾を失い、危険思想がモンゴルへ伝播することを怖れた支配層の一部には、庫倫駐在の中国代表陳毅と協議して中国との妥協をはかり、自治権の返上と引きかえに中国の保護を求めようとする者も出てきた。この動きに對抗して、「自治」時代に活動の場を得た下級役人や、比較的教育を受ける機会に恵まれていたラマ——つまり平民出身の知識分子——のなかから、ことの成行きを憂慮する人々が、三々五々と寄りあうようになった。

ところが、一九一九年の一月に安福派の徐樹錚が軍隊をひきいて庫倫にのりこみ、陳毅の交渉を押しつけて、強引に外蒙自治返上をボグド政府に「請願」させたのである。中国の直接支配を誇示した徐樹錚の政策は、対中妥協を考えていた王公たちをも離反させた。

これを機に進歩派の集りはそれぞれ十人あまりの二つの秘密グループに発展した。その一方の中心人物であるラマのボドーがロシア領事館に務めていた関係上、庫倫在住のロシア人たちの間にできていた革命派のグループと、やがて連絡がつき、彼らからソビエト政権の方針や思想を学ぶようになり、ロシア人革命グループのソロコヴィコ

フがソビエト・ロシアに報告に行き、コミンテルンの代表に任じられて帰って来るに及んで、彼の指導により二つのグループは合併して、モンゴル人民党を結成するに到った（一九二〇年六月二十五日）。そこでソロコヴィコフの助言により、ソビエト・ロシア援助要請の代表を派遣することも決定され、ダンザンとチョイバルサンが七月のはじめ、ひそかに庫倫を脱け出し北へ向った。ダンザンは税関の小役人であり、後に「モンゴルのスターリン」となったチョイバルサンは、「自治」時代にイルクーツクの中学校へ送られ、ロシア革命の勃発によって招び返された留学生の一人であった。

## 二 極東共和国におけるモンゴル代表

チョイバルサン自身の残した、きわめて率直な手記によると、二人は中国官憲の目をくぐってロシア側の国境の町トロイツコサフスクに入ることができたが、人に訊ねることを憚って二日間歩きまわった末に、やっとロシア領事マクステネクを探しあて、彼の世話により、極東共和国の臨時首都であったヴェルフネウディンスク（現在のブリヤート共和国首都ウランウデ）に送られた。<sup>(12)</sup>

ここで二人は一晚立派な部屋に閉じこめられた後、翌日会見に連れてゆかれた偉そうな人に名と職務をきくと、「私の名はチエルヴォニ。私の役職をきいて何になる。いずれ判ることだ」と答えるので、二人のモンゴル人は、「どういふ人と話しているのか判らなければ、こちらの大事な用件を伝えてはじまらない」として、彼の質問に答えることを拒否した。

この人物が、当時極東共和国の首相代理を務めていたボリス・シュミヤツキーであった。彼はモンゴル革命を演出した張本人のように思われているが、彼とモンゴル人民党代表の出会い、事実こういう光景だったのである。

シュミヤツキーは二人の話をきいてから、いずれ決定を知らせるから待つようにと云い、さらに、この地に中国人・日本人が沢山いるから、目立たぬように弁髪を切り洋服に換えるように注意した。

それから数週間というもの、二人は前後六回にもわたってシュミヤツキーを訪ね、返事を催促したが、いつも革命には忍耐が必要であるという長い説教をきかされるばかりであった。この間、二人の希望によって、彼らが以前に知っていた進歩的ブリヤート人、ジャムツァラノフとリンチノフが応援に招かれて、モンゴル代表を助けたが、この二人も、通常信じられているようにソビエト側から当てがわれたものではなく、二人の要請によって登場したのである。

シュミヤツキーの説教に対して、「貴下のお話はよくわかりますが、故郷の切迫した状況を考えると、こうしてはいられないのです」と訴えるモンゴル代表たちの言葉は、マーフィーらの想像する光景が事実といかに異っていたかを示している。<sup>(13)</sup>

こうして一カ月あまりも待たされているうちに、やっと八月一〇日になって、後にモンゴル革命の第一の英雄となったスフバートルを含む五名の同志が、ボグドの印璽を押した援助要請書をたずさえて到着した。<sup>(14)</sup> ダンザンらは彼らから自分たちの出発後にコミンテルンからS・S・ボリソフが庫倫に派遣されたことを知り、シュミヤツキーからはその事について何も知らされていなかったので、「進んだ国のしきたりというものは、まことに妙なものだ

あ」と心外らしく話しあつた。<sup>(15)</sup>

しかし、第二陣の到着は交渉の進展を示すものではなく、数日後に行われたシュミヤツキーとの会見で、彼は、「この市は緩衝国の領域にあり、ここで決定的な取りきめをすることはできない。日本・中国・白衛軍がスパイを使って監視しているので、ここでは極度の警戒が必要である」と説明し、モンゴル代表は鉄道でイルクーツクへ送られた。リンチノフが彼らと同行し、ジャムツァラノフは連絡のためヴェルフネウディンスクに残つた。<sup>(16)</sup>

### 三 極東共和国の成立とその内情

革命家として名高いボルシェヴィクのボリス・シュミヤツキーが、モンゴル代表の度重なる催促にも拘らず、何一つはつきりした返答をしなかったのには、当時のシベリアの状況が大きく関係していたと見られる。

一九二〇年には、極東におけるソビエトの地位は、まだきわめて危ういものであった。そして当時の記録によると、特にダンザンらがヴェルフネウディンスクに現われた時には、シュミヤツキー自身ひじょうに難しい立場におかれていたことがわかる。

コルチャク軍は同年一月にイルクーツクで潰滅し、連合軍のシベリア出兵は一応三月に終わったものの、日本軍はセミヨノフを擁してまだザバイカル地方の大半を抑えていた。日本軍を遠ざけるために、ソビエト政権が緩衝国としての極東共和国を設けたことは、ソビエト指導者がおかれていた苦境を示している。一九二〇年二月、レーニンはトロツキーに電報を送り、

モンゴル革命に対するソビエト・ロシアの軍事介入について

磯野

緩衝國家の反對者たちをきびしく弾劾し……党裁判にかけると脅す必要がある。そしてシベリアのすべての人々は、「これ以上東方へは一步も進むな。部隊と機関車の西方ロシアへの移動を促進するため全力をつくせ」というスローガンを実行しなければならない。シベリアの奥深く進むという愚かな行動に引きこまれて、その間にデニキンが勢いを盛りかえし、ポーランド人が攻撃にでることになったら、われわれは大馬鹿者といわれよう。これは犯罪行為である。」(一九二〇年二月一九日執筆)<sup>(17)</sup>

こうして同年四月六日にヴェルフネウディンスクで極東共和国の樹立が宣言され、ソビエト側が直ちにこれを承認したばかりでなく、日本側もこれを歓迎した。<sup>(18)</sup>泥沼にはまりこんだシベリア出兵を早く終了させる必要があったのである。しかし、ソビエト側は、内部の非妥協派のつき上げもあり、この共和国をできるだけボルシェヴィクの影響下におこうとしたのに対し、日本側が共和国のなかにセミヨノフの「チタ政府」<sup>(19)</sup>、続いて比較的穩健と見られた「ウラジオストク政權」を編入させようと期待したのは当然である。

そればかりでなく、新しくできた共和国政府の内部にもあつれきが生じた。臨時政府の首相となつたアメリカ帰りのクラスノシチョコフは、メンシェヴィクその他の政党もふくめて、共和国の幅を拡げようとしたのだが、彼の方針は共産党極東支局の左派メンバーの反對に会い、その強硬路線がモスクワによって支持された。そして、その立場をとるシュミヤツキーが副首相兼首相代理として任命された。しかしこの二人の仲はうまくゆくはずもなく、遂にクラスノシチョコフは自分の立場を説明・弁護するために、まずオムスクへ、それからさらにモスクワへと赴いた。<sup>(20)</sup>これは一九二〇年六月のことで、七月十日にヴェルフネウディンスクとチタの間にあるゴンゴタ駅で、日本



側との停戦交渉が開始された時には、シュミヤツキーが首相代理を務めていたのである。

停戦協定は七月一五日にとにかく成立し、チタの線での停戦と中立地帯設置が決められたものの、前々から共和国の性格に疑問を抱いていた日本政府は、大井司令官の進言により、ザバイカル地方からの即時撤退を延期した。<sup>(21)</sup> 前々から黒沢大佐は、極東共和国につき、「其代表者ハ過激主義ニ反対ナル民主共和国ヲ弁明シアルモ一時ノ口実ニ過ギザルコト愈明カニシテ衆屋ハ慥ニ『モスコ』政府ト睨ム」(五月二六日)、と報告しており、また停戦交渉中も日本代表は、「首相のクラスノシチヨコフがすでにロシアから来たアンドレイ・チエルヴォニ(シュミヤツキーの偽名)と交替させられている」ことを指摘して、共和国の独立性に不信を表明していたのである。<sup>(22)</sup>

それに加えてさらにもう一つの難問が生じた。極東共和国の唯一の中央政府であることを自任するヴェルフネウディンスク政権の主張は、ウラジオストク政権には受け入れがたいものであった。この「政府」はいわば各派の連立政権で、日本もセミョノフ支持がもはや不可能と見てからは、「寧ろ比較的穩健ナル浦潮政府ヲ守立テテ極東政権ノ統一ヲナサシムルコト然ルベシ」(六月五日)という方向を目指していた。<sup>(24)</sup> この政権はボルシェヴィクをも含んでいたが、日本側と直接に交渉しなければならない立場におかれて、彼らにしても状況の複雑さを中央の同志たちよりはるかによく理解していたのである。

停戦協定成立の直後、ウラジオストク政権の代表団が連合の交渉をすべくヴェルフネウディンスクに赴いたところ、シュミヤツキーの政府は、自分たちの政権を唯一のものと認めない限り、同市へ入る許可は出さぬと強硬に阻止したので、ウラジオストク側はモスクワに実情を訴える抗議書を送った。モスクワでは丁度クラスノシチヨコフ

が極東での妥協の不可避を説いていたところだったので、今度は彼の主張が通り、ロシア共産党中央委員会は八月一日に、極東共和国を「民主主義的共和国」にする旨を決定した。<sup>(25)</sup>

八月中旬に赤軍はワルシャワ附近で大敗し、クリミヤではウランゲルが立場を強化しており、クラスノシチヨコフは極東に急速な平和をもたらし、その兵力を西部へ援軍として送るよう全力をつくすと約束した。そして八月末に、彼は日本側や穩健派にも受入れられるような「民主的」緩衝国にする全権をゆだねられてヴェルフネウディンスクに帰任し、シュミヤツキーはただちに首相代理の任を解かれた。<sup>(26)</sup>これはモンゴル代表たちがイルクーツクへ発ってから、わずか数週間内のできごとである。

この事件はソビエト指導者たちがいかに譲歩の必要に迫られていたかを示している。一九二〇年一二月に開かれた第八回全ロシア・ソビエト大会で、レーニンは急進派の批判に対し、極東での妥協を弁護して、次のように述べた。

われわれは、日本帝国主義のためにシベリアの農民が信じがたいほどの苦難に耐えることを余儀なくされているのは、よく心得ている。……それにも拘らずわれわれは日本と戦争することはできない。日本との戦いを先にしたのでは、よく心得ている。……それにも拘らずわれわれは日本と戦争することはできない。日本との戦いを先にのぼすだけでなく、できることなら、それを避けるために、あらゆる努力をしなければならない。皆さんも御存知の理由から、日本との戦争はわれわれの力の及ばない仕事だからである（二月二日）。<sup>(27)</sup>

ソビエト政権にとっては、緩衝国を国際的に承認させて、日本に撤兵を強制することが何よりの急務であり、すでに一九二〇年五月には、I・L・ユーリンを頭とする共和国代表が任命されて、北京で中国政府のみでなく列国

の代表たちと折衝を重ねていたし、丁度ダンザンらがヴェルフェウディンスクに辿りついた頃に、中国の軍事外交使節団がモスクワへ赴くべく、当地でソビエト政府の入国許可を待っていたのである。<sup>(28)</sup>

こうした事情を考えると、シュミヤツキーが中国からの離脱にソビエトの援助を求めにやって来たモンゴル代表に、繰返し人目につかぬよう注意したのも当然である。そして、こうした危険にもかかわらず、モンゴル代表を一月余もヴェルフェウディンスクに留めておいたのは、ソビエトの指導者たちが、モンゴル人民党代表の扱いに窮していたのではないかと推測される。一九一一年の夏に、清朝からの独立を望んだモンゴル王公の代表たちが、援助を求めるため露都へ向けて出発した時、帝政ロシアの政府は中国との関係悪化、列強の反応を憂慮して、その処置に当惑したのであった。中国との対立をさけながら、モンゴルを味方につけておきたいというロシアの難しい課題が、政権は変っても、ここで再び提起されたのであろう。

#### 四 ソビエト・ロシアにおけるモンゴル人民党代表

八月一日にイルクーツクに着いたモンゴル代表は、ロシア共産党シベリア支局の極東民族部長ガボンに迎えられたが、彼らがボグドの印璽を押した援助要請状を差し出すと、ガボンは長いこと思案していたあげく、「後の証拠のため」としてやっと受取った。<sup>(30)</sup>そして代表たちは改めて党としての要請状及び人民党の目的と活動を明らかにした報告書を出すようにと告げられた。つまりボグドの親書はガボンが期待していたものではなかったのである。

このボグドの印璽については、なお疑問の点が多い。チョイバルサンが後に書いているところによると、「ウラ

ンウデ市の赤衛ロシア人の代表が、ボグドの印のある書面をぜひ出すようにというので (maple)」、とあり、<sup>(31)</sup> リンチノフらと相談して庫倫の同志に「ボグドの贈物を持ってこい」という暗号電報を打ったのだが、暗号がきめてあったところを見ると、その可能性は予測されていたらしい。庫倫では党の人々は、中国側の弾圧が強まっている時に、なぜ危険を冒してこのような企てをしなければならないのかをいぶかったが、ともかくも必要なものなら持つてゆかなければならないと決行し、ボグド側近の党の同情者たちを頼って、党で用意した書面にボグドの印璽を押してもらったのであった。<sup>(32)</sup>

ボグドも、すでにアメリカと日本にそれぞれ援助を要請したものの、どちらも見込みがなさそうなので、仕方なく人民党の書面に印璽を与えたのだが、ガボンがこれについて何も知らなかったことから考えて、やはりシュミヤツキーが、万一事が露見した場合の用心に、中国側が一応その外蒙での地位を認めていたボグドのイニシアティブに帰しておく方法をとったものではなからうか。

折角手に入れたボグドの印璽が不要であったことから、代表団内部の思想的立場の相違がはじめて表面化したのであるが、リンチノフの仲裁でもかく作成した報告書には、<sup>(33)</sup> 革命達成後も民情を考えてボグドをしばらく名目上の君主とし、民心の開明を待って再び革命を起すことが記されており、要請書では、武器と教官の提供と資金の援助を乞うが、<sup>(34)</sup> ガボンの質問に答えて、ソビエトの直接介入は求めない点を明確にしている。<sup>(35)</sup>

しかしガボンとの交渉も具体的な結果は生まず、モンゴル代表はシベリアの中央オムスクへ行けといわれた。それで一行は三組に別れて、ボドーら二人は党活動強化のため庫倫へ戻り、スフバートルとチョイバルサンはイルク

ーツクに残って、ダンザンらがオムスクへ出発したが、そこからさらにモスクワへと送られたのである。

公式のモンゴル共和国史では、この間スフバートルらがイルクーツクで軍事・政治的訓練にはげんだことに中心をおくが、チョイバルサンの手記は、モスクワからの知らせとモンゴルからの便りを一日千秋の思いで待っている二人の焦燥がつづられている<sup>(36)</sup>。こうして、モスクワからの返事のないままに、十月末になったのである。

## 五 ソビエト側のジレンマ

その間に、ソビエト指導者たちがどのような協議を行ったかを知るのは、今となっては難しいが、当時のロシアの実情を考えると、彼らがこの時点で勢力拡大の侵略にのり出したとは、どうしても思われない。一九五〇年代になつてさえ、「ソ連がモンゴルに注ぎこんでいる額に比して、モンゴルがソビエト経済に物質的な寄与をするところ<sup>(37)</sup>は殆んどない」とされるくらいであるから、ソビエトが経済的動機から、資源は豊富でも原始的輸送手段しかないモンゴルでの軍事行動に出たはずはない。

また政治的に見ても、ヨーロッパでの早急な革命が期待できず、アジア諸民族の反帝運動が重要さを増していたとはいえ、モンゴル人民の闘争は中国に向けられており、その中国はインドと共に、ソビエトが味方とすべき最も重要な国だったのである。

一九二一年三月一日のノースチャイナ・ヘラルド紙によれば、モスクワでの党大会の後でトロツキーは、

日本との戦争をおくらせるために、いかなる価を払っても中国にわが政権を承認させ、通商を開き、最も親密

モンゴル革命に対するソビエト・ロシアの軍事介入について

磯野

第六十二巻 三七一

な友好關係を結ぶよう努力すべきだ、というのがわが政府の考えである。

と書いて<sup>(38)</sup>いる。日本への圧力を別にしても、もしソビエトが中国にとって最初の平等条約を結ぶことができたなら、被植民地の人民には列国に対する大きな外交的勝利と受取られるであろう。モンゴル代表がモスクワへ向った頃に、中ソ交渉の基礎事項を示した「第二次カラハン宣言」が出されている（一九二〇年九月）。

ソビエト首脳部を難しいジレンマに追いこんだのは、モンゴル人民党は中国と戦うための武器を要請しているのであり、中国が外蒙を主権に関わる問題と見ていることは、歴史的にも明かであった。一方、もしモンゴル人民党の要請を拒否したなら、モンゴル人を失望させるばかりでなく、ソビエトが高らかに宣言している被圧迫民族解放のスローガンに対する信頼は、地におちることになる。

ソビエト政府は、モンゴルの革命派と中国の民族主義者たちを何とか妥協させようと試みた。すでにイルクーツクでガボン<sup>(39)</sup>は、「われわれは中国に代表を送って中国の『下級党』とモンゴル問題について満足のゆく解決を計っている」と説明したが、これは多分一九二〇年春コミンテルンから北京に派遣されたヴォイチンスキーの事を指している<sup>(40)</sup>と見られ、モンゴル代表がその要請書で、ソビエト政府が「中国人民の党」との接触を仲介してくれるように望んでいるのは、ガボンの助言を反映している。モスクワでダンザンらを引見したレーニンも、在モンゴル中国人を撲滅することを考えずに、中国・日本両国の帝国主義と闘うために、中国人民と親交を結ぶように、と説いており、一月十日にコミンテルンでの援助によりイルクーツクで印刷された人民党紙「モンゴルの真実」にもこの旨<sup>(41)</sup>が唱われている。

しかしソビエト政府としては、モンゴルと中国の進歩派を和解させるだけでは済まされなかった。もっと重要な急務は、中国政府と正式な外交関係を結ぶことであつた。少し後の話ではあるが、一九二三年に北京に赴いたカラハンは、孫文と個人的な接触は持ちながらも、中国の内政に関することにはふれないとして、「南」との正式交渉に入ることを拒んでいる。<sup>(42)</sup>

モンゴル革命をソビエトの画策とする論は、ソビエト政府とコミンテルンの能率性と統一行動の能力をあまりにも過大評価しているようだ。E・H・カーもドイツについて指摘しているように、<sup>(43)</sup>モンゴルにおけるコミンテルン代表は、革命的思想・運動の拡大に熱心なあまり、人民党の人々に、ソビエト・ロシアが喜んで援助することを保証したが、複雑な内面的・外的状況のなかで具体的政策をたてなければならぬ政府の指導者たちは、「たてまえ」に従つてのみ行動するわけにはゆかなかつたと考えられる。

しかし一九二〇年十月に起つたウンゲルンのモンゴル侵入によりソビエト政府は何らかの決定をすることを迫られたのである。

## 六 ウンゲルンのモンゴル侵入

イルクーツクで焦燥の日を送っていたスフバートルらのもとにやっと届いたモンゴルからの便りには、ウンゲルンのモンゴル侵入と、彼とモンゴル側の接近をおそれ強化された中国官憲の弾圧が記されてあつた。<sup>(44)</sup>

一九二〇年八月、ゴンゴタの停戦協定が結ばれた直後に、セミヨノフの僚友ウンゲルン・シユテルンベルク男爵

は、セミヨノフを離れ極東共和国の南部国境を荒らした後に、十月はじめモンゴルの東北部に入った。この二人の決裂はカムフラージュであるとの説が当時汎く伝えられたが、これは、「日本が停戦協定の結果セミヨノフを見放さなければならなくなったため、反逆という形でウンゲルンをセミヨノフから離し、日本は彼の行動には責任がないとしながら、実は背後で糸をひいている」、と見るのである<sup>(45)</sup>。

一方中国側がボグド自身まで監禁するに及んで、モンゴル人の反中感情はもえ上り、ウンゲルンの陣に加わる者が続出したので、最初はコサックを中心とする千人足らずの諸民族混成部隊であったのが、十月末には二千騎となつて庫倫に攻撃をかけた。

この知らせに、スフバートルらはモスクワのダンザンに電報を送り、交渉の促進を催促すると共に、独自に直接ナルコミンデルにあて、新事態はソビエト・ロシアにとつても有害であることを指摘して、ソビエトの軍事介入を要請した<sup>(46)</sup>（一一月二日）。チョイバルサンは、これまでモスクワの決定を待っている間、ブリヤートの友人すら寄りつかなくなった、と書いているので<sup>(47)</sup>（多分彼らも返事を迫られるのを避けていたのであろう）、この要請がソビエト側の差しがねでないことは確かである。

一方モスクワではダンザンらは突然ソビエト政府より、必要なだけの資金と武器の援助を約束されたが、それには、白軍が露領に入らない限り、ソビエトは直接介入しないとの制限が付されていた。この通告の日付は明らかでないが、ウンゲルンの庫倫攻撃の直後であったことは、まちがいない。

モンゴル代表たちは、四カ月も待たされたあげく、今度はいそいでモンゴルに戻り、党员をふやして抵抗を組織



するように、といわれた。<sup>(48)</sup> 一行は一一月末にトロイツコサフスクに着き、義勇兵を募る準備をする一方、国境の王公たちも味方につける工作を始めた。

他方ソビエト政府は中国に対して二回にわたり（一月十日と二七日）反ウンゲルン共同行動を申し入れたが、庫倫の中国軍が数日の戦闘の後にウンゲルン軍を撃退していたこともあり、中国側はこれを拒否した。八月に失脚した徐樹錚に代って再び庫倫に任命され、ウンゲルンの攻撃と前後して着任した陳毅は、ボグドを「自宅監禁」の形で宮殿に戻すなど、対中感情を和らげることに努めたが、すでに手おくれで、ウンゲルン軍を解放軍として頼み、その陣に加わるモンゴル人は数を増した。

こうして準備を整えたウンゲルンは、一九二一年一月末に、奇襲作戦により中国側の手からボグドを救出し、数日後には庫倫を完全占領した。そしてボグドを皇帝<sup>ハハ</sup>の位に戻してモンゴル政府を再建し、事実上はその実権を握ったのである。敗走した中国官憲と軍隊の大半は、北方キャフタに避難したが、本国との連絡を断たれた中国人約三万は、食糧補給のために周辺のモンゴル人から徴発・掠奪を行ったので、この地方の移民たちは、自衛のためにも進んでスフバートルの募兵に応じた。

しかしこの時点で、せっかく約束を取りつけたソビエトの援助に、またもや問題が生じた。マクステネクが、モンゴル政府がウンゲルンと協力するようになったのでは、援助するわけにはゆかぬ、と通告したのである。スフバートルは、しばらく黙っていたあげく、「人民党はモンゴル牧民のために闘っているのであり、ウンゲルンに組した王公たちは人民の敵です」と答えた。<sup>(49)</sup> 反中国民族主義から発生した人民党は、ここではっきり革命党としての立

場をとることになり、シベリアの内戦はモンゴルにまで波及したといえよう。

この間にも、ソビエト政府は中国との対立をさける最後の努めとして、キャフタに在る陳毅に再び反ウンゲルン共同作戦を申し入れたが、北京がソビエト軍の行動を国境から二五里以内に限ることに固執したため、交渉は遂に三月三日に決裂した。<sup>(51)</sup>三月一日から三日間にわたりトロイツコサフスクで第一回党大会を用いたモンゴル人民党は、次いで臨時人民政府を組織し(一三日)、キャフタの解放を決定した(一四日)。これは、中ソ交渉の不成功により、ソビエト側が同意を与えたものと見られる。その頃には義勇軍の総数は約四百に達していた。

キャフタは三月一八日に陥落したが、ソビエト軍はこの戦いには直接参加せず、国境を挟んだトロイツコサフスクに逃げ込んだ中国官吏・軍人は、極東共和国の世話により、シベリア経由で本国に送りかえされた。

早速キャフタに移った臨時人民政府は、四月一〇日ソビエト軍の介入を正式に要請したが、シベリアのパルチザンらがモンゴル義勇軍と協力して、ウンゲルン軍の支隊との小ぜりあいに参加してはいたものの、赤軍が本格的に出動したのは、六月に入ってからウンゲルンの主力がトロイツコサフスクを攻撃してからのことであった。

まず五月末にウンゲルン下のモンゴル部隊がキャフタを攻撃して敗退し、続いてトロイツコサフスクに迫ったウンゲルン主力も、六月一五日赤軍と共和国軍に破られて、モンゴル領内に退却した。同じ一五日にチチュエリンは今一度北京政府に共同作戦を提唱したが、北京は張作霖がウンゲルンの対策に当たっているからとして拒否した。<sup>(52)</sup>

この返答はソビエト側にとっては、むしろ脅威を感じさせるものだったろう。当時、張作霖は外蒙奪回のため多額の軍資金を手に入れながら、実はウンゲルンと内通している、といううわさが立っており、両者の後には日本が

いると疑われていたのである。ウンゲルンが捕えられた時に持っていた書類のなかに、張作霖に於てた手紙が数通見出されたといふ。<sup>(53)</sup>これは後の偽造ではないかとの説もあるが、そのなかに、当時の庫倫の事情に通じていた者でなければ知らないような、そして偽造の目的には全く不必要な細部も記されているので、<sup>(54)</sup>少くともウンゲルンの方からは、張作霖を清朝復興のチャンピオンとしておだてて、彼との取引きをまとめようとしたとも見られる。

六月二日、ロシア共産党の中央政治局はウンゲルン軍掃討のためにモンゴル領内に軍事行動を拡大することを決定し、二七日に赤軍は国境を越えた。モスクワは中国側が白軍に対する有効な処置をとらないので、止むを得ずこの行動に出るが、白軍の掃討が完成した後、直ちに撤兵する、と北京政府に通達した。<sup>(55)</sup>

赤軍、極東共和軍、モンゴル義勇軍は庫倫に進撃し、七月一日に同市を占拠した。ウンゲルンが北へ向った後、庫倫の防備は薄く、革命軍が接近すると、留守番役の白軍将校は東へ脱出したので、取り残されたモンゴル王公たちは、仕方なく、革命軍を「歓迎」し、臨時人民政府に政権を引き渡した。そしてボグドは予定どおり、実権のない君主として存置されたのである。このようにして、ソビエトの直接介入のおかげで、モンゴル人民党は急速な勝利を得ることができた。

赤軍がモンゴルに入ったのは、ウンゲルンがトロイツコサフスクで決定的な敗北を蒙った後であることをもって、ソビエトの侵略的意図の証拠とする論もあるが、この敗北を契機として始まったウンゲルン軍内部の不満とそれによる崩壊は、今でこそ明らかであるにしても、当時の相手方に知られていたとはいえず、また、いかに残党とはいえ、その兵力はモンゴル義勇軍だけの手にはあまるものであったのは当然である。対ウンゲルン戦に参加した

赤軍の士官キスロフによれば、全員騎兵からなるウンゲルン軍を追って、味方の部隊間の通信も思うにまかせない国境の山岳地帯で、歩兵をふくんだ赤軍の作戦は困難をきわめたのである。<sup>(56)</sup>

さらに最も重大な脅威は、シベリアから西モンゴルに退却していた白軍の將校たちが、そこで勢力の増強と統合を計っており、その上、北モンゴルの中心をなすハルハ族の支配を必ずしも喜ばない西モンゴル諸部族の離反も考えられることであった。モンゴル臨時人民政府は七月一三日、つまり庫倫解放の直後に、反革命勢力が一掃されるまでソビエト軍がモンゴル領内に留ることを要請した。

七月末にウンゲルンが一時シベリアへ入った時、モンゴル義勇軍は、「ソビエト軍は今後その軍事行動を国境内に止めるから、モンゴル軍は自国内の残敵討掃に当るように」、との通告を受けた。<sup>(57)</sup>しかし、ウンゲルンは再びモンゴル内に撃退され、西部の白軍との合流を志したもの、ウンゲルンの凶暴性と敗戦に志気を失った部下たちは、東へ逃れることを望んで叛乱を起し、ウンゲルン暗殺を謀るに至った。危うく脱出したウンゲルンは、最後まで彼に従っていたモンゴルのスンドウイ公<sup>ジン</sup>に裏切られ、赤軍に引渡された。<sup>(58)</sup>スンドウイはその目的でウンゲルンを離れなかったのである。<sup>(59)</sup>西部の白軍がソ・モの共同作戦によって一掃されたのは、一九二二年一月のことであった。

シベリアの内戦が終り、一九二二年十月に日本が沿海州から撤退したので、緩衝国の必要も消滅し、極東共和国はその十一月ソ連に合併した。

## 七 ウンゲルンと日本

マーフィーは、ウンゲルンの数千ばかりの混成軍が、シベリアの赤軍に眞の脅威を与えたはずはない、とする。<sup>(60)</sup> いかにか当時のシベリア軍は西部へ援助に廻されて手薄になっていたとはいえ、総勢一万余のウンゲルン軍に、<sup>(61)</sup> 数の上では圧倒的優位を保っていたことは確かである。

しかし、H・ノートンも指摘しているように、長い国境をウンゲルンの不測の攻撃に備えて防備することは軍事的にも財政的にも難しく、

一九二一年の中葉には、もしその反動的勢力が除かれなければ、たとえ攻撃がなくなるともその存在自身が、同国（極東共和国）の生血を涸渇させ、敵の恰好の餌食となることは明らかであった。<sup>(62)</sup>

という状態であり、緩衝国の崩壊は日本との再度の対決を意味すると考えられた。日本軍は一九二〇年十月にザバイカル地方から撤兵したものの、いまだに沿海州を抑えており、その上、ソビエト指導者たちは、ウンゲルンは日本の手先であると固く信じていたのである。

しかし、日本側が当時からウンゲルンを真面目に取上げていなかったことはたしかである。積極派の佐々木到大尉の報告（一九二二年三月一六日稿）にも、「極東共和国の基礎未タ定マラス民心漸ク離叛セントスルノ時『ウンゲルン』支隊ノ将来モ亦注目ニ価スルモノアリト謂フ可キナリ」と前置きしながらも、ウンゲルン個人は、「発作的狂人ニ近」く、「元来彼ハ極東ノ統一ト云フカ如キ高遠ナル理想ニ基テ行動スルモノ」ではなく、「過激派ニ対スル

不俱戴天ノ恨ト其ノ英雄的野心ノ満足ニ基因セルノミ」と断じている。

しかし、佐々木大尉も、結論として、

当時彼ノ隊ニ在ル日本義勇兵ニヨリテ諜知スル所ニ依レハ彼ハ先露蒙国境附近ニ兵力ヲ集結シ次テ庫倫ヲ陥レテ外蒙ノ独立ヲ宣ス可シト云ヒ、或ハ遠ク「イルクターツク」方面ヲ衝ク

意図であり、

而シテ其勢力ハ今直ニ極東共和国ヲ転覆スルノ力無シト雖モ少クモ常ニ極東共和国軍ヲ此方面ニ牽制シ将来勞農政權ノ基礎動揺シ極東ニ真面目ナル反過激運動起ルニ至テハ「ウングエルン」軍ハ極東共和国崩壊ノ動機ヲ作ルニ至ルモノト判断ス<sup>(63)</sup>

と述べている。これはノートンの分析を裏書きするとともに、日本軍内の積極派が抱いていた一種の期待を匂わせているといえよう。日本政府の懸命な否定にも拘らず、ウングエルンの後には日本がおり、彼には日本軍人が顧問として配属されていたと信じられていたのには、やはりそれだけの理由があった。佐々木大尉の報告に見られる「日本義勇兵」というのは、畑山という予備下士官を頭とする五〇名ばかりの大陸浪人たちが、それぞれ階級を偽ってウングエルン軍に加っていたのである。

ウングエルン敗退後にチチハルの領事館に收容された彼らの残党二四名を取調べた須佐嘉橘囑託の報告（大正十年一月五日）は、彼らは「見識モナク志モナキ素質不良ノ徒ナリ」と見ながら「又タ我駐在武官等ノ陰ニ援助督励シタルハ拭フ可カラザル事実ナリ」と断じている。<sup>(64)</sup>

畑山自身はウングェルンの庫倫占領前に、彼と不和を生じて中国側に投降し、張家口へ逃れた部隊に連行されたのである。彼の「<sup>(66)</sup>自白事項」によると、彼は二年前より、「黒木大尉ノ紹介ニテ將軍（セミヨノフ——磯野）ニ面会」しており、その後ウングェルンに従ったが、「当時武器トシテハ……小銃ハ黒木大尉ヲ經テ日本ヨリ購入セリ」という事情であつた。また須佐の報告には、ウングェルン軍に加つた日本人の供述として、彼らが「赤塔ニ在リタル事アリ」（その内容は記していない——磯野）とし、さらに黒木大尉が『ウングェルン軍』ノ総指揮官トナラントシタル議モアリ、又本年六七月ノ交ニ滿洲里ニ在ル特務機關依田少佐ト『ウングェルン』トノ間ニ書信ノ往復等ヲナシタル』ことが見えている。また彼らによると、ウングェルンは「常ニ口癖ノ様ニ日本軍隊ト約束アリテ日本政府ノ応援云々ト日本人（多分庫倫在住日本人——磯野）等ニ向ッテ説キツ、アリテ」というから、彼自身も日本の支持を信じていたものと思われる。

ソビエト側の資料は、ウングェルンの日本人顧問は「もし彼がザバイカル地方に首尾よく進出すれば、日本軍が援軍に赴くと思わせていた」<sup>(66)</sup>とし、ウングェルンも一九二二年九月に現在のノボシビルスクで裁判された時、「日本軍が滿洲からチタに進攻すると思つていた」のに当てがはずれ、やむなくモンゴル領に引返したことを述べている。<sup>(67)</sup>

このウングェルンの期待は、次のような事情に基いている。彼は庫倫から北へ進撃する少し前、五月二一日付に出した「布告一五号」のなかで、自分は「セミヨノフの指揮下にある」ことを明記し、セミヨノフが「日本の援助を得て、もしくはそれがなくなるとも、ウスリー地方で行動を起し」、この反攻は「厳格な計算と広い政治的計画に基い

たものであるから必ず成功する」と宣言しているが、この布告の直後、六月はじめに、事実沿海州で白軍の大規模な攻勢が始まったのである。

日本は公式にはこの行動に中立の立場をとったが、ソ連指導者はこれも日本の謀略と考え、六月一九日第三回全ロシア食糧会議で、レーニンはこれを「極東共和国ではじまっている日本の干渉」と呼んでいる。<sup>(70)</sup> この演説はソビエトの中央政治委員会が赤軍をモンゴル領内に入れることを決定した三日後に行われている。

レーニンの対日疑惑を深めたと考えられる事情がもう一つあった。当時極東共和国の大臣の一人であったドヴォルキンによると、一九二〇年一月クラスノシチョコフは、田中將軍によって書かれた日本の大規模な侵略計画を手に入れて、レーニンに送った。<sup>(71)</sup> この「田中メモランダム」は、前年の八月一三日に、田中陸相が外交調査委員に送った「田中覚書」あるいはそれに類するものであったと思われるが、「満蒙ヲ基礎トシテ我国勢力ヲ伸暢スヘキ絶好ノ地域タルト共ニ満蒙地方ヲ防護スヘキ第一線」である極東ロシアを抑えてボルシェヴィク勢力の東漸を阻止するための、田中の大軍派遣提案は、原内閣の容れるところとはならず、極東共和国の承認、ザバイカル地方撤兵となったのである。<sup>(72)</sup> しかしそれにも拘らず、この「田中覚書」はシベリアの積極派將校たちの間に廻されていたらしい。

こうして見ると、ウングエルンばかりでなく、日本政府の秘密閣議決定を知るよしもないソ指導者たちが、日本の侵略的意図を確信していたのも無理からぬことであつたと云えよう。その後一〇年を経て実際に起つた日本の大陸侵略は、彼らの疑惑の真実性を裏付けるものと考えられたのである。



## 八 赤軍の進駐と中国

ソビエト首脳部は、客観的に見れば日本の脅威を過大評価していたのに比して、中国の反応には楽観的でありすぎたのかもしれない。赤軍のモンゴル進駐は当然中国側の反発をひき起し、折角妥結に近づいたと見えたユーリンの極東共和国承認の交渉は、これで御破算となった。<sup>(73)</sup>九月一〇日にモンゴル臨時人民政府は、ソビエト政府に中国政府との間で仲介の労をとるよう要請したが、<sup>(74)</sup>もちろん北京政府の耳をかすところではなかった。

ソビエトがその後中国に送った使節の重大な障害となったのが、モンゴル問題であったことは、ここで繰返すまでもあるまい。反動的な北京政府ばかりではなく、孫文も一九二二年、「モンゴルの独立に同意するか」、ときかれ、<sup>(75)</sup>た時、断固として「否」と答え、共産党青年同盟の極東支局書記セルゲイ・ダリンを驚かせたし、一九二三年のヨッフエ・孫会談では、ソビエトがモンゴルに対する中国の主権を承認することを条件として、孫文はソビエト駐屯部隊の即時撤退を要求しないことに同意した。

また、一九二二年一月の極東労働者会議で、ジノヴィエフは、革命的な南部中国指導者たちのなかにさえ、「モンゴルを中国の支配下に戻すことを提唱するほど、反動的な分子」のいることを嘆いている。<sup>(76)</sup>わずかに中国共産党のみが、モンゴル、チベット、新疆を、中国の連邦国家のなかの「自治国」とするよう主張しているにすぎず（一九三二年七月、第二回党大会）、一九二四年の五月にやっと締結された中ソ協定は、赤軍の撤退を条件とし、モンゴルを中国の一部と認めたものであった。<sup>(77)</sup>

同年八月に開かれたモンゴル人民党の第三回党大会では、五月にボグドが死んだ後、人民共和国を宣することを決定したが、ソビエト側の代表と、コミンテルン代表のリンチノフは、この中ソ協定の説明に苦しみ、モンゴルに実害はなく、中ソが仲よくすることはモンゴルにとっても大切であることを強調しているが、<sup>(28)</sup>事実、中国の内紛とそれに続く日本の進出によって、中国は外蒙に対する主権の行使はおろか、内蒙をも失うことになったので、モンゴル人民共和国はソ連の「弟国」として、第二次大戦後中国が外蒙の人民投票の結果を認め、その独立を承認するまで、事実上の独立を保つことができたのである。

(本稿は『*Past & Present, a Journal of Historical Studies*. Number 83. May 1979 に掲載された“Soviet Russia and the Mongolian Revolution of 1921”に基づいているが、日本語にするにあたり、全面的に書き改めたものである。)

## 註

- (1) その代表的なものは Murphy, George G.S.: *Soviet Mongolia*, (Berkeley and Los Angeles, 1966) である。
- (2) Hamond, T. T.: “The Communist Takeover of Outer Mongolia: Model for Eastern Europe?” in T. T. Hamond (ed.): *The Anatomy of Communist Takeovers* (New Haven and London, 1975), pp. 107-44.
- (3) Murphy, p. 7 → p. 27.
- (4) 田中克彦『草原の革命家たち』(中公新書、昭和四八年)特に第一章—第三章。磯野富士子『モンゴル革命』
- (5) (中公新書、昭和四九年)一章と二章。中見立夫『ボグド・ハーン政権の対外交渉努力と帝国主義列強』(アジア・アフリカ言語文化研究 17、一九七九年)など。
- (6) 王聿均『中蘇外交序幕』(台北、一九六三年)、三八頁。
- (7) Дашканти, Д.: *Марксизм-Ленинизм Монголд дэлгэрэн хэрэгжсэн нь* 『マルクス・レーニン主義がモンゴルで発展し実行された次第』(ウランバートル、一九七四年)、二二頁、註1。
- (8) ソビエト・ロシアの首都はすでに一九一八年三月にモスクワへ移されているので、これはモンゴル側の誤記かと

思われ。

- (8) モンゴル科学アカデミー編 *Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсын Түүх* 『モンゴル人民共和国史』第三卷(ウランバートル、一九六九年)、五四頁。なおこの第三卷のみ英訳が出ている。Brown, W. A. and Onon, U.: *History of the Mongolian People's Republic* (Cambridge, Mass. and London, 1976) pp. 53-4.
- (9) Кудяков, И. Ф., Никитов, В. И., Перевражко, А. С. (ed.): *Советско-Китайские отношения 1919-1957: Сборник документов*. Кристина Кофман等編『ソビエト・中国関係文書集』(モスクワ、一九五九年)第一卷、四三—五頁に「カラハーン宣言」の原文が収録されている。
- (10) Барочир, Л., Дашрам, Л.: *Дамжингийн Сүхбаатар, намтар*. Б.トオチル、ダシジャムツ『ダムデインのスフバートル——伝記』(ウランバートル、一九七三年)、六八頁。どちらにしても、ボグドの自治政府はすでに同年一月末、徐樹錚によって解消されており、正式の政治の中心はなく、ただ有力王公や高位ラマたちの寄り合いがあったにすぎない。
- (11) Кунгуров, Г. и Сорокозиков, И.: *Арагская революция* Кэнгロフ、ソロコヴィコフ『牧民の革命』(イルクーツク、一九五七年)、八三—四頁。Чойбалсан, Х., Монгол革命に対するソビエト・ロシアの軍事介入について

- Дамд, Г., Дорж, Л.: *Монгол ардын үндсийн хувьсгалын анхны байгуулалдын мөч* Түүх. Ч. Ибалсан他『モンゴル人民革命の発端と成就の略史』二卷(ウランバートル、一九三四年)上、八八—九四頁。
- (12) 前記チョイバルサン他『人民革命の発端と成就』上、一〇—一二頁。
- (13) 同上、一二—一三八頁。
- (14) 同上、一三八—一四〇頁。
- (15) 同上、一七〇頁。
- (16) 同上、一七二—一七四頁。
- (17) Ленин, В. И.: *Полное собрание сочинений* 『レーニン全集』第五版(モスクワ、一九五八—六九)。第五一卷、一三七頁。この日本語訳は『レーニン全集』(大月書店、一九六八年)第四四卷、四四〇頁 No. 526 に見られるが、本稿の訳文は磯野による。
- (18) 『日本外交文書』大正九年第一冊下巻、六六〇—六八六頁「事項一二、極東露領ニ緩衝地帯設置問題一件」。
- (19) 参謀本部『西伯利亚出兵史』(一九二四年、一九七二年復刻、新時代社)下巻、三九三頁。六月十日付、陸軍大臣の要旨指示。
- (20) Парфенов, И. С.: *Борьба за Дальний Восток*. Палフェノフ『極東を目指す闘争』(レニングラーズ、一

磯野

第六十二卷 三八五

- 九二八年) 二二三—四頁。Никитин, И. М.: *Записки премьера министра* Д.В.Р. Никитин, 1947. 『首相のメモワール』(モスクワ、一九六四年) 二二四頁。Шереметев, В.М.: *Разгром Семёновщины* Шереметев, 1947. 『セミョノフ派撃滅』(ノヴォシビルスク、一九六六年) 一六〇—二頁。
- (21) パルフェノフ『極東を目指す闘争』二二九—三二頁。
- (22) 『日本外交文書』大九、一、下、六七二頁、六七五—八頁。
- (23) パルフェノフ、二二九頁。
- (24) 『日本外交文書』大九、一、下、六七九頁。
- (25) ニキフェロフ『首相のメモワール』二二二頁。
- (26) パルフェノフ『極東を目指す闘争』二二五—四一頁。この部分は、各派閥の対立と交渉の過程を詳しく描いている。
- (27) 『レーニン全集』ロシア語版、第三一巻、四三—五頁。日本語版、第三一巻、四七一—二頁。訳文磯野。
- (28) Казанин, М.И.: *Записки секретаря миссии* Казанин, 1947. 『使節団秘書のメモワール』(モスクワ、一九六三年) は、ユーリンの一行に秘書兼通訳として随行した著書の記録である。
- (29) Хейфец, А.Н.: *Советская Россия и сопредельные страны востока, в годы гражданской войны, 1918—1920 гг.* Хейфец, 1947. 『一九一八年—一九二〇年の内戦時代のソビエト・ロシアとその隣国』(モスクワ、一九六四年) 四〇八—九頁。
- (30) Чойбалсан, Х.: 『人民革命の発端と成就』上、一七五頁。
- (31) Чойбалсан, Х.: *Натгэд ба үзүүлэлтүүд*. Чойбалсан, 1947. 『演説・論文集』第三巻(ウランバートル、一九五三年) 三八五頁。
- (32) Чойбалсан, Х.: 『党の発端と成就』一四二、一四九—五三頁。
- (33) 同上、一八三—七頁。
- (34) Шренкель, В.: *Монгол Ардын Хувьсгалын түүх*. Шренкель, 1947. 『モンゴル人民党党史』(ウランバートル、一九六九年) 一六七—八頁。「報告書」の原文は『*Монгол Ардын Хувьсгалт Намын түүхэнд хөдөөдөөх баримт бичгүүд*』(ウランバートル、一九六六—七〇年) 第一巻一—一二頁に見られる。
- (35) Чойбалсан, Х.: 前掲書、一七八—八〇頁。
- (36) 同上、一三一—六頁。
- (37) Sutton, Antony: *Western Technology and Soviet*

*Economic Development, 1917-1930.* (Stanford, 1968) 一八頁、三四五頁。

(38) North-China Herald (Shanghai) 一九二二年三月五日。

(39) チョイバルサン他『党の発端と成就』上、一七八頁。

(40) Eudin, X and North, R.C.: *Soviet Russia and the East* (Stanford, 1957) 二〇三—四頁。

(41) *Монголын Үнэн* 一九二〇年一月十日。

(42) Хейфец, А.Н.: *Советская дипломатия и народы востока, 1921-1927* 22. «Искусство» 一九二二—一九二七年のソビエト外交と東方民族 (モスクワ、一九六八年) 二八一頁。

(43) Carr, E. H.: *The Bolshevik Revolution* 3 vols. (Pelican Books, 1966) 第三卷、三三〇—一頁。

(44) チョイバルサン他『人民革命の発端と成就』二三七—九頁。

(45) Кислов, А.Н.: *Угэртнийг бут цохилдоо* Кислов『ウンゲレン撃滅』(ウランバートル、一九七二年) 一六七頁。これは *Разрозн Угэртна* (モスクワ、一九六四年) のモンゴル語訳である。

(46) 『党関係資料』第一巻、一二—三頁。

(47) チョイバルサン他、前掲書、上巻、二四〇—九頁。

モンゴル革命に対するソビエト・ロシアの軍事介入について

(48) 同上、二四七—九頁。

(49) 『ソ・中関係文書集』上、五三—五頁。この中国の拒否は、ウンゲレンの攻撃のため庫倫を中継地とする電信が不通となったため、一九二〇年の末になって、ロンドンを通じて届けられた。

(50) Д. Сүхбаатарын тухай дурдлагаар. 『Д. Сүхбаатарлун тухайн 回想集』(ウランバートル、一九六五年) 八一—四頁。この会談に同席した Л・Дембелелの記述。

(51) 『中俄関係史料—東北边防・外蒙古、中華民國十年』(中央研究院近代史研究所編、台北、一九七五年)。「外蒙古」七—一二頁。

(52) 同上、一〇三頁、一〇七頁。

(53) これらの手紙は、後に極東共和国がワシントン會議に証拠書類の一部として提出したもので、そのコピーは、アメリカのスタンフォード大学、フーヴァー研究所図書館に MS. DK254 U7L65 として保存されている。

(54) たとえば、手紙の一つには、ボグド政府の首相ジャルハンザ・ホトクトが、一九二一年五月西モンゴルに派遣された後、マンジュシュリ・ホトクトが首相を代行していた事実が記されている。

(55) ハイフェツ『ソビエト外交と東方諸民族』二四—五

磯野

頁。ソビエト軍がモンゴル進撃を開始した日付を六月二十六日とする著書もあるが、ここではキスロフの日付に従った。

(56) キスロフ『ウングェルン撃滅』七九—九〇頁。

(57) *Монгол Ардын Жүрамт Цэргийн дурдатгалууд*. 『モンゴル人民義勇軍兵士の回想集』(ウランバートル、一九六一年)、五三九頁。B・ブンツァクの回想。

(58) モンゴルの文芸週刊新聞(Урлаг)の一九六七年一月二十七日号には、ウングェルンを捕えたスンドウイ公の部下の一人が語った回想がのっている。

(59) *Ардын Жүрамт Цэргийн дурдатгалууд*. 『人民義勇軍兵士の回想集』(ウランバートル、一九六九年)、六四八頁。これはスンドウイ公にこの計略を授けたM・ヤリンの回想である。

(60) Murphy: *Soviet Mongolia* 一〇頁。

(61) キスロフ『ウングェルン撃滅』三八頁の推定による。

(62) Norton, Henry K.: *The Far Eastern Republic of Siberia*. (London, 1923) 二二七—八頁。

(63) 防衛庁戦史資料室蔵『西密大日記』大正十年五月「バロン・ウングェルン」軍戦闘力並持久能力ノ判断ニ関スル資料。浦潮参謀本部より五月一日陸軍次官へ送られた報告に付された、浦潮派遣軍司令部附、元満洲里特務機関長、陸

軍歩兵大尉佐々木到一蒐集編纂の資料は、大正十年三月一日日稿となっている。

(64) 外務省外交資料室蔵『ロシア革命』附、「ウングェルンの庫倫攻撃」(大正十年、一門、六類、三項)中、『ウングェルン』軍ニ備ハレタル日本人ノ行動始末」と題する、須佐嘉橘の報告。

(65) 防衛庁戦史資料室蔵『西密大日記』、大正十年、六冊中の六、外交雑、第八一号、支常報、第五拾六号、三、「畑山孝太郎ノ自白事項」。

(66) Венок, А. Г.: "Политработа в народно-революционной армии" (ヤキモフ、「国民革命軍における政治工作」、ナウカ発行、『Гражданская война на Дальнем Востоке (1918-1922)』極東における内戦(一九一八—一九二二)』(モスクワ、一九七三年)所収。三二二頁。

(67) キスロフ『ウングェルン撃滅』八五頁。

(68) ウングェルンの「布告第一五号」の原文は *Революция на Дальнем Востоке* (Государственное издательство) 『極東における革命』(政府刊行物、モスクワ、ベトログラード、一九二二年)に収められている。四二九—三三頁。

(69) 『西伯利亚出兵史』下巻、一三二〇—一二頁、一三二九頁。

(70) 『レーニン全集』ロシア語版、第三二巻、四四三頁。

日本語版、第三三卷、四七三頁。

- (71) Дворкин, Я. М.: "Из воспоминаний сотрудника министерства иностранных дел ДВР." 「極東共和国外務省職員の思い出より」。前出『極東における内戦』一九一八—一九三二』所収、二四六頁。
- (72) 細谷千博『ロシア革命と日本』（原書房、昭和四七年）、一四八—一五〇頁。
- (73) Whiting, A.S.: *Soviet Politics in China, 1917-1924* (New York, 1954) 一六三頁。
- (74) 『モンゴル人民革命党史に関する資料』第一巻、一一〇頁。『ソビエト・中国関係。文書集』上巻、一〇—一一頁。
- (75) Leong, S. T.: *China and Soviet Russia: "Their Diplomatic Relations, 1917-1924"* (Harvard University. Ph. D. thesis 1972) 三四六頁。
- (76) Friters, Gerard M.: *Outer Mongolia and its International Position* (Baltimore, 1949). 一九四頁。
- (77) *Новый Восток, Журнал* 『新東洋誌』（モスクワ）第一巻（一九二二年）、三八九頁。
- (78) *Монгол Ардын Намын Гуралдагч их хурал*. 『モンゴル人民党の第三回党大会』（モンゴル人民革命党中央委員会所属党史研究所、ウランバートル、一九六六年）、一五頁、二九頁、八一—六頁。